



昭和大礼前後の学校図書館状況-「学校図書館経営号」(広島高等師範学校附属小学校『学校教育』第185号)の内容に注目して-

國枝, 裕子

(Citation)

研究論叢, 15:1-14

(Issue Date)

2008-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008653>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008653>



昭和大礼前後の学校図書館状況

——「学校図書館経営号」（広島高等師範学校附属小学校『学校教育』第185号）の内容に
注目して——

國枝 裕子（南九州大学）

1. はじめに

戦前日本における「学校図書館」は主に大学等の高等教育における図書館を示す言葉として使われ、初等・中等教育における図書館の実態は貧しいものであった。だがそのような状況下でも、一部の先駆的な事例としてはあれ、学校図書館実践が行われていたことは先行研究の指摘するところである¹⁾。またこれと関連し、近代日本においては、昭和大礼の「御大典」記念事業として各地の図書館が設けられたことが、社会教育史や図書館史研究において明らかにされている。しかしながら、その図書館のうち学校附設のものに注目し、当時の学校図書館がどのような実態を持つものであったのか、またどのように活用されたのかについて、教育界の動向を踏まえて詳しく論じた研究は管見の限り見当たらない。学校図書館史研究のうえでも、単に昭和の大礼記念事業として新設または内容の充実が企図されたという事実の指摘のみでなく、当時の各地の学校図書館の状況がいかなるものであったのかを把握しておくことは重要である。本稿では、この課題に対する有効な資料として、広島高等師範学校附属小学校が発行母体であった『学校教育』の1928（昭和3）年11月号にあたる「児童図書館経営号」を取り上げたい。この特集号の前号に掲載された特集の意図は次のとおりであった²⁾。

聖代の盛事、御大典の儀もいよいよ来月に迫りました。この儀を祝すための記念事業が、全国各小学校に計画されてゐるやうです。その最も多きは、学校図書館、

児童図書館の施設経営だときいてゐます。この時勢に添ひ、微力を捧げるため、本誌は十一月を期して「児童図書館経営号」なる倍大号を出すことに致しました。東京、大阪、京都等の各小学校に於て実施されてゐる状況は申すまでもなく、専門の児童図書館長の調査報告など多方面の玉稿を載せることにしてゐます。その外、附小同人が手分けして、児童参考図書類の現物にあたり、選択し、批評しました書目、資料など満載する予定で、着々と歩をすゝめてゐます。

つまり、この特集号には各地域の小学校の学校図書館に関する報告、公共図書館いわゆる「通俗図書館」の児童サービスの状況、小学校教師の手による読物調査等が掲載されており、とくに各地の実践報告からは1928（昭和3）年当時の学校図書館を網羅的に知ることが出来ると考えられるのである。もちろん雑誌に掲載された報告という性質上、模範的なレベルの学校図書館が取り上げられている可能性が高く、ただちに当時の平均的な学校図書館状況を知ることは出来ない。だがしかし、そこで報告されている内容からは、取り上げられた学校図書館の何が理想とされ参考とされたのか、つまりどのような学校図書館が求められたのかという当時の学校図書館像を知る手がかりとなるものと考えられるのである。

2. 1928（昭和3）年の「御大典」記念事業と学校図書館

それではまず、この臨時号が出された契機ともなった1928(昭和3)年の「御大典」について、その記念事業と図書館との関わりについて概括しておこう。

1928(昭和3)年の「御大典」にあたっては、記念事業としてさまざまな施設が設けられた。各府県、各市、各町村における事業の概要を見ると、「小学校校舎新改増築並敷地拡張」「図書館設立又は充実」「文庫設置」といった事業が目立っている³⁾。天皇制を利用して全国に図書館を設置しようという試みは昭和の大礼の際だけでなく、すでに1915(大正4)年の大正大礼記念としても行われていた。昭和および大正の大礼と図書館との関係について研究をまとめた東條文規によれば、図書館設置は各種計画されたさまざまな記念事業のうちでもかなり重要な位置を占めていたという⁴⁾。それは『大正大礼記録』の「記念事業施設種類表」において、記念事業として図書館の設置を掲げたのが市レベルで第一番、町レベルで三番目に簡易図書館の設置、四番目に巡回文庫の設置、学校主体で第一番に図書館の建設、図書閲覧所の設備、記念文庫の設立、と記録されていることから明らかであった。これに関わって日本図書館協会は、「御大礼記念図書館設立意見」の建白によって図書館設立が御大礼記念事業として最もふさわしいと主張し、『図書館小識』の刊行によって図書館の具体的モデルを提案していた。このように日本図書館協会を中心とする図書館界が最大の国家的イベントに便乗して図書館の充実を図り、同時に国家も記念事業として図書館新設・充実を目論むという構図は、昭和の大礼の際にも見られたのであった。

1928(昭和3)年1月に日本図書館協会理事長の今井貫一が各府県市当局に提出した「御大礼記念事業として図書館の設立及び充実に関する意見」と題する意見書では、府県立図書館、市町村図書館について論じた後、学校図書館についても次のように言及してい

る。「学校図書館は単に学校の従属物でなく、教室で教へられた原理を応用し、理解する研究室である故、これの有無良否は学校の価値を左右いたします。これらの新設、拡張、整備も、御大典記念事業として好適であることを確信いたします」⁵⁾。このように図書館界においても学校図書館の必要性が認められ、公共図書館とともにその充実が求められる段階であったと言える。

この状況は同年12月3日に開催された第22回全国図書館大会において、協議題の一つに「児童生徒指導ノ為メ全国小学校中等学校二適当ノ図書館ノ設置ヲ奨励セラル、様主務省へ建議ノ件」が静岡県立葵文庫長であった貞松修蔵によって提出されていることから明らかである⁶⁾。この大会を受けて、翌1929(昭和4)年1月には文部省に提出された建議で「児童生徒指導ノ為メ全国小学校中等学校二適当ナル図書館ノ設置ヲ奨励セラレタキコト」との文言が盛り込まれた⁷⁾。その理由は「自学自習ヲ奨励シ読書趣味ノ涵養ニ資センガ為メ小学校中等学校ニ附設セラル、図書館ノ内容ヲ充実セシメ其利用ヲ一層有効ナラシムルト共ニ普ク図書館ノ附設ヲ奨励セラル、ハ現代ノ教育ニ於テモ最も必要ナル事項ナリト認ム」⁸⁾ためと説明されている。当時の図書館界が、学校図書館が教育上最重要の設備であるとの認識を有していたことがわかる。

さらに、この時期の図書館界における学校図書館に関する議論を詳しく追うと、先の貞松が提出した建議には、「既に小学校には殆ど図書館は設置されてある」、「町村立図書館と重複し、経費の点から云つても実現不可能」、「主務省に建議するのは図書館員の不名誉である。協会自ら努力すべき」といった異論が思いのほか多く、討議により、わずかに7票差で可決されたという事実が目される⁹⁾。のちに貞松は『図書館雑誌』で「実験実習の教育機関として学校図書館の充実について」と

題し、法令の不備がある点、教育の理論上より必要である点の2点から建議提出の動機を詳細に説明している¹⁰⁾。それは、学校教育が教科書暗誦、上級学校への試験通過のみを目的としている現状に対する批判であり、知識を練磨し、個性尊重、自律的学習態度の形成が重要であり、そのためには学校内への図書館設置とその活用が不可欠であるとの主張であった¹¹⁾。建議提出以前の論考にも、個性尊重の教育のために学校図書館の充実が必要であり、図書館中心の教育へと進歩すべきだという主張は表れている¹²⁾。貞松は別稿でも、当時教育界で流行していた「自由教育」「ダルトンプラン」「プロジェクトメソッド」といった教育方法にも触れ、それらは「畢竟個性尊重の教育」で「此個性尊重の教育こそ真の教育である」と述べている¹³⁾。教育方法にまで言及して学校図書館の必要性を説いている点の特筆すべきであろう。そして「上は大学より下は小学校に至るまで自発的研究の風を作興するやう教育の方針を改め校内の図書館を充実して利用を奨励すること」と述べるように「自発的研究」の重要性を初等教育においても強調していたのであった。

貞松と同じく公共図書館人であった奈良県立図書館長の堀内竹蔵も「図書館は先づ初等教育の内へ喰ひ入ることである」として、「現今の初等教育方面から観察するならばもつと深く今の教授方法の内へ、図書館的教授方法を採用すること」と主張しているように¹⁴⁾、図書館界において、教育方法の問題としても学校図書館が認識されるようになっていたのである。ただし、このような図書館界の学校図書館への提言は、積極的に教育界へと浸透することはなかった点もこの時期の特徴として指摘されている¹⁵⁾。それでもなお「児童図書館経営号」のような学校図書館に関する臨時号が成立したという事実からしても、教育界独自で学校図書館に対する認識や議論、実践が深まりつつあったと見ることができよう。

教育界の学校図書館に関する認識や議論はどのようなものであったのか、以下、『学校教育』臨時号の内容を確認することで、大礼記念事業が活発であった1928（昭和3）年当時の学校図書館に対する教育界の動向を分析していきたい。

3. 「学校図書館経営号」（『学校教育』第185号、1928年11月1日発行）

（1）その構成

それではまず、この特集号を企画した『学校教育』について確認しておこう。『学校教育』は1914（大正3）年1月1日創刊の広島高等師範学校を刊行母体とした雑誌であった¹⁶⁾。同校の校友会の一部として発足した教育研究会が、すでに1906（明治39）年3月から刊行していた『教育研究会講演集』を発展させる形で月刊雑誌としたものである。この教育研究会は1914（大正3）年までの8年間で、講演会31回、大会7回、展覧会6回、講演集の発行7集など、会員を教師、学生、交友会員に限定して活動していた。その組織を拡張して、市販の教育雑誌へと発展したのであるが、本誌は最初、広島高等師範学校、同附属中、同附属小の三者による合同で編集されていた。その後、1925（大正14）年4月以降は、附属小において編集が行われるようになり、『学校教育』は附属小の機関誌的役割を果たしていた。本誌の特色としては「論説」と「研究」中心の欄構成、新教育に対する比較的冷静な紙面構成という2点が指摘されている¹⁷⁾。本節で取り上げる1928（昭和3）年11月の「児童図書館経営号」は、創刊から数えて13番目の臨時号であった¹⁸⁾。まず、その目次構成を見ておこう。【表1】で確認できるように、その構成は大きく分けて、「児童図書館経営の諸問題」「児童図書選択の実際」の二つである。前者については「地方的施設経営」¹⁹⁾と、各教科から見た読物に対する考察の2題に充てられていた。この臨時号の企画は、「本学年

に入ると直ぐに計画してゐた」もので、7月下旬に中山栄作が樺太への講演の際に、東京、大阪、京都、神戸、札幌へと立ち寄り、寄稿を依頼して回った。また、後半の「児童図書選択の実際」をまとめるにあたっては、附小の同人等が「数日間連続的に数百乃至数千冊の読破」を行なったのだという²⁰⁾。時間的に見ても、かなりの熱意を持って編まれた号であったことがわかる。この号を作り上げた『学校教育』の発行母体である広島高等師範学校附属小学校に関して見れば、1911(明治44)年にはすでに「児童の知徳を啓発すへき図画書籍雑誌を備へ読書を愛好する念自習の習慣等を得せしむ」ために児童図書室が設けられていたという²¹⁾。この当時、どの程度の活用がなされていたかは不明であるが、学校図書館の経営は当の附属小にとっても学校教育上の重要な問題として受け止められていたのであった。

(2)「地方的施設経営」報告に見る当時の学校図書館像

では次に、各論考の内容を詳しく見ていこう。まずは、「児童図書館経営の諸問題」のうち「地方的施設経営」について報告された11編から、何が論じられているのかを分析する。その内容を、論題及び執筆者、呼称、その論考において想定されている図書館の形態、論考の趣旨、論じられている内容について、読み取れる範囲でまとめてみると【表2】のようになる。

まず執筆者に注目すると、二つが公共図書館人の筆によるものであった。早くから児童サービスを充実させたことで知られる日比谷図書館で児童部主任を務めていた小谷誠一は、「新に児童図書館を経営せんとする方々の参考にもならば」との意図で日比谷図書館児童室についての論考を寄せている²²⁾。もう一編の富山図書館長の辻尚郎がまとめた「児童図書館について」²³⁾は、「幼少の時より読書の

趣味を有せしむるのみならず読書によつて自己を陶冶し自己の人格を練達するの手段方法の指導をしておくことが肝要」と述べている。これは読書趣味の涵養、読書による自己教育のための図書館の必要性という当時の図書館界でごく一般的に論じられていた意見にとどまり、先の小谷と同様、学校に図書館を置くことの積極的意義が提示されているわけではない。辻が「児童図書館」「小供図書館」という用語を混用していることから明らかなように、ここで論じられる図書館は、単に子どもが利用する図書館という意味しか付与されておらず、学校教育と密接に関わる図書館像は描かれていないのである。先に見た教育方法の問題としても学校図書館を認識していた公共図書館人・貞松などの事例は、当時の公共図書館界においてやはり一部の先駆的な人々のみに限定されたものであったと推察することが出来よう。

そして残る他9編は学校関係者によって書かれたものであったが、その中でも子どもが学校教育において利用する図書館としての形態ではなく、公共の児童図書館または青年の利用する公共図書館の役割を兼ねさせたものに関する報告があり、いまだ学校図書館の意義、範囲自体が曖昧なものであったことがうかがえるのである。例えば、大阪市西六尋常高等小学校の西六文庫西六図書館はもともと学校職員と児童のみに開放した学校図書館であったが、一般にも開放する公立図書館へと変化させていった図書館であるという²⁴⁾。そのため学校図書館というよりも、いわゆる公共図書館の児童室サービスとしての役割が目指されており、小学校の児童の利用時間も放課後のみと定められていた²⁵⁾。

しかし、ここで紹介されている図書館の形態は、現代的な意義での学校図書館を念頭に置いたものが含まれていた点は強調しておくべきであろう。

広島市袋町尋常高等小学校の図書館におい

て注目すべきは、「図書館に入る児童は解決すべき問題を持つて居らねばならぬこと」との決まりがあったことである²⁶⁾。つまり、この学校において図書館は児童の疑問を解決する場として想定され、研究の場としての図書館が目指されていたのであった。「全く児童各自の問題をスタートして好める方面への活躍研鑽である」場として活用されていたのである。そこでの教師は「解決のための相談相手」「補導者」であり、「教師が万能であると考えないで、児童と齊しく学習者としての位置に立つて共に研鑽し共に学習する様に努めてゐる」という態度であった。

京都市視学の城野が寄せた報告は、32頁にも及ぶ京都市全体の学校図書館状況をまとめた詳細なものであった²⁷⁾。「昭和三年八月三十一日現在」の合計37校の「京都市小学校児童文庫施設状況」一覧がまとめられているなどかなり入念に調査された報告である。京都市では85の小学校のうち、「御大典記念事業の一つとして更に現在のものを良く改良し拡張して一層内容の充実を計ることにつとめてゐる小学校が三十二校」²⁸⁾あるという。

城野が説く「児童図書室（児童文庫）」が必要とされる理由は、①児童心理の発達上から、②児童の個性を個別的に発達せしむる為に、③国定教科書を補ふために、④国民の文化生活向上から見ても、という四点にあった。主に、「読書」の重要性を説く内容であるが、③について見れば、教科書の不備の補完を説いており、ただ読書することを促進するためだけではなく、学校での正課の学習との関連も視野に入れていたと言えよう。このことは次の点から見ても明らかである。京都市では将来の計画として、児童図書館を独立した施設としてではなく、「各学級及び特別教室文庫設置に方針を立てゝゐる」た。それは、専用独立の図書館では次のような欠点があるとの考えに基いていた²⁹⁾。

- （1）児童の個性に適応せる学習指導をなすこと困難である。
- （2）児童図書館は多くの場合に、少数児童（特に読書興味を有する優等生）のみの専有となる。
- （3）図書館主任の教師のみ、文庫備付の図書に精通して学校全教師は無関心のこと多し。
- （4）低学年に利用せられざる欠点を生ず。
- （5）閲覧時間著しく制限せられる。

これらの欠点を補い、「随時本課の課目と連絡して自学自習の学習訓練を増すこと大なるものがあるとの意見で柳池校着々とその計画を進めてゐる」³⁰⁾とあるように、やはり単なる課外読物の置き場として読書教育をなす場としてだけではなく、正課の学習への利用をも含めた構想がなされていたことが読み取れるのである。

さらに、東京市錦華小学校長であった後藤良平は、児童図書館の「設備経営の如何は直に自学自習教育作業主義教育の成果に影響すること大であることを想へば、他の経費を節しても之等図書室の経営には之を吝にしてはならぬ」³¹⁾と断言している。同様の考えが、広島市中島小学校長細川求己の論でも主張されていた。ここでも「児童図書館の建設は、彼等の学習上なくてはならぬこと」³²⁾と明言されているのである。そして、「児童が自分で研究したい、調べて見たいと思つても辞書や参考書がないため折角の研究心を十分働かす事が出来ない状態」である現状を打破するために、この大典記念として図書館建設の必要性を父母等に説いていることが報告されている³³⁾。ともに校長として後藤も細川も、経費面での困難を乗り越えてでも、子供の自発的学習心を培う教育のために学校図書館が必要であることを強調していたのである。

つづけて後藤は、実際の図書室の目的も「自

学的教育主義に基く調査設備の一として之を設け、児童生徒の学習上の調査をなさしめて、知能の修得、健全なる精神の養成を第一義とし、兼ねて読書趣味の向上読書力の増進を図り尚自学自習の態度習慣を養うこと³⁴⁾と掲げている。実践としては「正課内閲覧」と「課外閲覧」の形態をとり、前者の場合は「正課時間中学習上の必要に応じて、担任訓導が児童を引率し来り、其指導の下に全学級的又は分団的方法によつて之が閲覧指導をなすものである。然して此場合は学級に自由を与へて、決して時間割的に指定をしない」という活用の仕方をとっていた³⁵⁾。ただし、「学級文庫設置完了すれば之の正課内閲覧は其必要と度数とを減少」させる予定とされており、児童の学習のより身近に書籍を準備する環境が目指されていたことがわかる。

図書館に備えるべき図書のうち、「学習に直接役立つべき図書」については「学級毎に普通教室内に備付けるがよい」とされ、その指導は「学級主任」が行ない、「各科目の夫々を深める為に、又、各科目の複合的關係に於ける図書」である「特種の研究的書籍」については、特別教室に配当され、その主任が指導に当たるべきであるとして³⁶⁾、学級への図書の設備と学校全体としての図書館とを、その管理・内容面からはっきり区別していた所もあった。

また、神戸市神戸尋常小学校の図書館の経営の目的の一つには「(四) 実地研究の補助機関として」の役割が掲げられている³⁷⁾。それは「読書は単に之を受容せるに止めず、更に進めて実地研究の動機となし、補助機関となさなければならぬ。例えば理科手工に於ける実験観察、工夫製作等の実行にまで到達してこそ其の読書が真に消化せられたもので、学習上にも直接に間接に好結果を齎すこととなるであろう」ことが期待されてのことであった。

ここで梅田は「一般の児童図書館と学校に

於ける図書館との得失」について考察しており、両者の概念の違いを明確に意識している点は注目に値する³⁸⁾。学校図書館のほうが、物理的にも心理的にも児童に身近なものである点や、「図書の購入にも経営上にも、其の学校其の学級に適した処置が出来て、学校教育と関連して統一的に歩調を合せることが出来る」点などを強調している。さらに、学校内における図書館として「学校図書館」と「学級図書館」とに区別し、「学級図書館」の長所を三点指摘している。

第一、いつでも如何なる短時間にも、授業中でも休憩時間中でも随時に手早く利用出来る。第二、其の学級相当のものを選び、部数も自然少くてすみ、其上常に目にふれてゐる為に何所に如何なる本があるといふ事がよく判つてゐるから、手早く利用出来る。第三、受持教師が日々指導管理にあたる為に、学校全体の図書館よりも適切で便利であり、且教師児童に於て思ふ存分研究批判することが出来る。

そして、実際に梅田のいる神戸尋常小学校では、学級図書館には「大体に於て直接教科学習指導に関係多き辞書、参考書、副読本、解説書、指導書等」を備えており、学校図書館には「一般的に読書力を増進し、不知不識の間に一般知識常識を伸し、児童の心情を育てる様な文芸的読物と趣味的な科学読物を多く備える」というように区別していた。図書選択にあたっては「東京日比谷図書館調査の児童読物、茗溪会の読物調査報告、成城学校の児童読物の調査等」を参考にしているという³⁹⁾。

これらの報告に共通しているのは、図書館や図書室という独立した施設の充実が目指されていたのではない点である。ここで報告されている実践の志向するところはむしろ、「学

級文庫」と呼ばれるのが最も適当なまとまった図書の設備の充実であった。子どもの学習において図書を有効に利用するという教育現場の真摯な実践の中から本当に望まれたのは、子どものより身近にある教室における素朴な文庫であったのである。

(3) 児童図書選択の実際

この号の後半の「児童読物選択の実際」は、収集すべきと判断された児童図書の一覧が各教科別に、70頁にわたって紹介されている。附属小における児童読物研究会の各教科の同人らが「いかなる書を選択すべきか」という観点から調査した結果の報告に充てられたのである⁴⁰⁾。この臨時号が出たのと同じ1928(昭和3)年に「教育畑の人たちの手になる学校図書館経営を扱った最初の単行書」⁴¹⁾と評される3冊の書が刊行されている。その一つは前節で取り上げた小林佐源治のものであり、ほか2作は成城小学校訓導であった奥野庄太郎『児童文庫の経営と活用』、および谷口武・浜野重郎『児童図書館の経営方法と優良図書目録』であった。これらもその書の半分近くを図書紹介にあてている。しかし、その目録と比較してもこの臨時号での各教科別図書目録はかなり詳細であり、実際の図書館経営にあたる教師たちにとって、即座に役立つ目録になったものと考えられる。附属小の教師たちが選択にあたっているため、「高学年の児童には面白くして修養に資する」⁴²⁾や、「五六年以上の児童読物として好適」⁴³⁾といったように児童の発達段階を考慮に入れた選択がなされていた。また、「小学の上学年児童及び中等学校の下級生徒の読物として解り易く書いてあるばかりでなく、教師の参考書としても亦実によい読物である」⁴⁴⁾と言ったように、教師のための読物も紹介されている点で、かなり実地的な選択基準が設けられていることがうかがえる。教科ごとに細かな違いはあるものの、全体的には読物の内容の概説、特色、

対象とされるべき学年、その使用法などが、短くではあるが付されている。内容は賛美しつつも、活字のポイントの小ささを指摘しておくなど、実際に子どもが読物を活用する際の配慮も忘れられていない点は、やはり現場の教師であるからこそその目録作りであったと言える。

さらに、この号に掲載された56頁にわたる10編の読物論には、各教科の読物に対する教師たちの考えが色濃く反映されている。その内容を順に追ってみよう。

まず、野澤正浩「最良自習書の出現を望む」では国語読本に即した自習書に限定して論じられた⁴⁵⁾。野澤は、自習書によって得られた「独自の学習力」は生涯を通じて有効であり、また在学中も他教科の自習に必要な「読む力と経験」を身につけることに寄与するとの基本姿勢を記している。

続いて修身の読物について論じた堀之内恒夫は、ふさわしい読物とは、①暗示性に富むもの、②深味のあるもの、③国民的常識談がほしい、④地方的美談を失わぬようにしてほしい、⑤成功談と共に公民談もほしい、⑥読物の子どもへの影響力の大きさを考慮し周到なる用意がほしい、⑦芸術味の豊かなものがほしい、⑧すべての読物を教育的な見地から用意すべき、という8点を指摘していた⁴⁶⁾。

童話文学について論じた原田直茂からは、翻訳童話に関し、①残忍性を刺激し、暴力を賛美するが如き童話、②親子間の純情を害うような童話、③淫蕩なる生活を描いた童話は避けるべきであり、また④詐術の展開する童話は適宜改作を試みるべき、⑤極度に恐怖せしめる童話は採らないという注文がつけられている⁴⁷⁾。さらに、新作童話に関しては①卑俗化し、俗っぽいものになった、②平凡化した、③人生の悲哀や暗い部分をあまりに多く描きすぎる、④童話の含む思想そのものが、児童の生活に比してあまりに高すぎる、⑤象徴化の程度が高すぎる、⑥結末のないものが

ある、⑦表現があまりに繊細にすぎはしないか、という七つの欠点が指摘されている⁴⁸⁾。

また算術科の松井和夫は、算術の児童読物には、「各学年の学習書」、「中等学校への入学準備書」といった問題集が大半を占め、「参考書物的物語的所謂読物」が少ないという点に、疑問を投げかけている⁴⁹⁾。同じく算術の課外読物について論じた山本の論考では、当時の状況の一端を垣間見る現実的な指摘がなされている⁵⁰⁾。

近頃は学校経営の一つとして児童図書室のことが矢筈しい。それには文学的な書物以外に十五%位は算術書も備はつてゐるとどこかの統計に見えてゐる。これも結構なことである。たゞ児童が「先生イツ読ンダライデスカ」と問うた時に、少々考へさせられることがある。(中略)よもや、どこかの新式学校の様に授業時間中でもいつでも構はぬ、気の向いた時に、気に入つたものを読めとは言はれない。

児童のための読物が備えられてきたとはいえ、一般的にそれを十分活用する段階には至っていないことがわかる。また山本は、自学のために自習書が用いられることは良い傾向だと認めつつも、先の松井と同様に自習書の解説を子どもが引き写すだけのような利用法に疑問を呈した。学級文庫に算術書を備え付けた場合も、教師が「無二の良検定委員」なのであり、「アノ〇〇算術の何頁を開いて見ると参考になることがある」、「アノ〇〇算術のどこかにモット程度の高い面白い問題がある筈だ」と算術教授に即した利用の促進のための、教師の役割の重要性を指摘している。

この山本も含め、論者の共通点として、「自学」をキーワードに論じたものが多い点が挙げられる。例えば、歴史科の読物について論じた中山栄作は、自学思潮の高潮は喜ぶべき

ものであるが、その流行に迎合して作られた読物には注意が必要であり、「たゞそこに用ひる品物と、其の読み方用ひ方などに問題がある」というように論じている⁵¹⁾。そして、①通史教化史の類、②時代史・時代物の類、③伝説・物語り・伝記の類、④文化史・外国史の類、⑤辞書・年表・歴史地図の類、⑥学習書・研究書の類、の6種類に分けて読物選択の標準やその使用法等について詳細に分析している。そこでの内容は、自身の経験を踏まえ①のような読物は子ども各自に一部づつ用意すべきであるといったことや、②③のものは異なった種類のものを多く備え付けるほうが良い、といった実践に基く記述である。そして、算術について論じた先の論者と同様に、⑥学習書・研究書の類については、「自学をはきちがへた教師指導者」の存在を指摘し、くれぐれも参考書に引きずられた学習に陥ってはならないと注意を促している。自学が流行していく中で、教科書ガイド的な安易な参考書が普及し始め、子ども自らが研究し学ぶことを目的として作られた図書の少なさや、またその活用が実際には十分でなかったことを浮き彫りにする指摘であると言えよう。

同じく「国史」に限定してではあるが、歴史読物の理想を論じた大久保の論考でも、「随分いろいろなものが出て居る様であるが、中には下らないものが少なくない手にとるのさへいやなのが大部分ある」と記されており⁵²⁾、どのように「下らない」かを説明してはいないものの、読物の数量的豊富さが必ずしも、質の向上につながっていたわけではないという当時の読物についての状況を示していると見てよい。

理科読物について考察した関原吉雄は、第一に「理科教授学習上の基本的方便物とは考へずに、飽くまで理科研究の補助的なもの附随的なものと見て取扱ふこと」、第二に「自然界の物象に対して明確な観念を得た後に、児童がその知識を広くするため、更には理科の

物象に対して正確な理解を得させるため」に活用することが望ましいとしていた⁵³⁾。具体的な学習における活用について触れている点は、やはり自らの実践を反映しているからこそであろう。この関原も「自学自習」について言及しているが、理科という教科の特質上、理科での自学自習の「最高教鞭物は飽くまで事実事物」であり、これについての「一方便物として、この理科読物の活用といふことを重要視」していた⁵⁴⁾。

児童読物について教科別の選択について考察された論考は、この特集号以外でも多く見られるが、ここで注目されるのは体育に関する読物にまで考慮されていることである。大石静信による「体育に関する児童読物の出現を望む」と題した論考であるが、他の教科に比べて音楽及び体育の読物の少ないことを指摘しているのがあった⁵⁵⁾。先に見たこの号の目録にも修身科、国語科、算術科、国史科、地理科、理科、体操科、音楽科、図画手工科、裁縫・家事科、月刊雑誌の順に、それぞれ推薦される図書が解説付きで示されており、音楽科、図画工作科といったいわゆる実技系の教科に関しても網羅されている点は、他の読物調査と比べて、大きな特色であったと言える。

4. おわりに

以上見てきたように、広島高等師範学校附属小学校の『学校教育』『児童図書館経営号』は当時の学校図書館像を知る多くの報告を掲載し、図書選択に対する選択基準からは、実際の現場に立つ教師たちの学校図書館観を浮き彫りにするものであった。そこから明らかになったのは、1928（昭和3）年当時の学校図書館が大札記念事業として、単なる創設を目的とするのではなく、さらなる充実が目指される段階に移行しつつあったことである。その実践においては、単に修養のための読書趣味の涵養を目指すだけでなく、学校教育の

中での子どもの学習と結びつけた活用へと展開し、それは学校図書館があってこそ成り立つ学習のあり方そのものへの議論へと発展していったのであった。もちろん、児童図書について本号での目録や各論が、教科という枠組みに縛られて論じられていることから、教科の垣根を越えた研究的自学の追求といった、根本的な学校カリキュラム観の転換にまで議論が及ぶことはなかったことは見落としてはならない。

しかしながら、各地の報告から明らかになったように、子どもが本当に図書を活用するためには図書が常にその身近になくなくてはならないという認識を教師たちが持ちえていたこと、そのために必要とされるのは「文庫」という教室内でのささやかな、それでいて周到に教師によって準備された学習環境なのであるという指摘は、見過ごすことができない。

形式的な施設の整備が学習の質を左右するのではなく、その施設設備を活用するための教師の学習観こそが大きな鍵を握っていることを、これらの実践報告は教えてくれるのである。もちろんこれを、現代のより複雑なメディアを取り扱う学校図書館の理論へとそのまま結びつけることはいささか尚早であるが、それでもなお現代の我々が学校教育の充実のために必要とされる学校図書館づくりを目指すうえで、真に考えるべきことが何たるかを先人たちの歩んだ学校図書館実践は示唆しているのである。

<註>

- 1) 塩見昇『日本学校図書館史』全国学校図書館協議会、1986年。
- 2) 編集子「編集余録」『学校教育』第184号、1928年10月1日、146頁。
- 3) 『昭和大礼記録資料』第1巻、不二出版、1990年(内閣記録編纂委員会『昭和大礼要録』内閣印刷局、1931年の復刻版)、548-574頁。
- 4) 以下、大正大礼と図書館および昭和大礼と図書館との関係については、東條文規『図書館の政治学』(青弓社、2006年)によった。
- 5) 今井貫一「御大典記念事業として図書館の設立及び充実に関する意見」『図書館雑誌』第99号、1928年2月15日、41頁。
- 6) 「第二十二回全国図書館大会記事」『図書館雑誌』第110号、1929年1月15日、16頁。
- 7) 「建議提出」『図書館雑誌』第112号、1929年3月15日、98頁。
- 8) 同上記事、98頁。
- 9) 「第二十二回全国図書館大会記事」『図書館雑誌』第110号、1929年1月15日、23-24頁。
- 10) 貞松修蔵「実験実習の教育機関として学校図書館の充実にについて」『図書館雑誌』第114号、121-125頁。ただし、この論考をはじめ、学校図書館に対する貞松の結論は、「危険思想を防止する思想善導上有効な施設というものであった」という限界も指摘されている(福岡礼子「草創期の児童図書館」児童図書館研究会『児童図書館のあゆみ——児童図書館研究会50年史』教育史料出版会、2004年、35頁)。
- 11) 塩見昇「Ⅳ 第一章戦前の学校図書館と日本図書館協会」(日本図書館協会『近代日本図書館の歩み本編』1993年、日本図書館協会)、356頁。
- 12) 貞松修蔵「教育の本質より観たる図書館(行詰まれる教育の新生面打開策)」『図書館雑誌』第97号、1927年2月15日、381-383頁。
- 13) 貞松修蔵「個性教育と図書館」『図書館雑誌』第86号、1927年1月15日、11頁。
- 14) 堀内竹蔵「図書館運動と初等教育」『図書館雑誌』第86号、1927年1月15日、12頁。
- 15) 塩見昇「Ⅳ 第一章戦前の学校図書館と日本図書館協会」(日本図書館協会『近代日本図書館の歩み本編』1993年、日本図書館協会)、351頁。
- 16) 以下、『学校教育』に関する記述は次の研究に拠った。木戸若雄『大正時代の教育ジャーナリズム』玉川大学出版部、1985年、17-18頁。樽松かほる『『学校教育』教育ジャーナリズム研究会『各誌解題』(教育関係雑誌目次集成第Ⅱ期・学校教育編第20巻)、日本図書センター、1989年、87頁。三好信浩『日本師範教育史の構造』東洋館出版社、1991年、255-257頁。
- 17) 樽松、同上書、88頁。
- 18) 『創立四十年史』復刻版(日本教育史文献集成 第2部師範学校沿革史の部8)第一書房、1982年、173頁。
- 19) 原田生「編集余録」『学校教育』第185号、1928年11月1日、321頁。なお、煩雑になるのを避けるため、以下、雑誌名のない引用はすべて『学校教育』第185号からのものとする。
- 20) 同上論考、321頁。
- 21) 島根県安濃郡役所『東京市・広島市・近畿地方学事状況取調書』島根県安濃郡役所、1911年、8-9頁。
- 22) 小谷誠一「児童図書館の設備」、58-63頁。
- 23) 辻尚邨「児童図書館について」、63-66頁。
- 24) 大阪市西六尋常高等小学校「西六文庫西六図書館経営の実際」、121頁。
- 25) 同上論考、125頁。
- 26) 広島市袋町小学校「我が校に於ける図書館教育と学級文庫」、142頁。
- 27) 城野亀吉「京都市小学校児童図書室の現状」、67-99頁。
- 28) 同上論考、96頁。
- 29) 城野亀吉「京都市小学校児童図書室の現状」、96頁。
- 30) 同上論考、96頁。
- 31) 後藤良平「児童図書室経営の実際」、100頁。
- 32) 細川求己「児童図書館を建設せよ」、148頁。
- 33) 同上論考、149頁。
- 34) 後藤、前掲註31)に同じ、102頁。
- 35) 同上論考、107頁。
- 36) 川合善和「小学校図書館ユートピア」、152-153頁。
- 37) 梅田公策「学校学級児童図書館の実際及理想」、131頁。
- 38) 同上論考、131-133頁。

- 39) 同上論考、134 頁。
- 40) 「児童図書選択の実際」、231 頁。
- 41) 塩見昇『日本学校図書館史』全国学校図書館協議会、1986 年、97 頁。
- 42) 堀之内恒夫「修身科」、234 頁。
- 43) 同上論考、235 頁。
- 44) 古場政喜・松井和夫「算術科」、255 頁。
- 45) 野澤正浩「最良自習書の出現を望む」、167-171 頁。
- 46) 堀之内恒夫「修身の読物に対する希望の一端」、171-178 頁。
- 47) 原田直茂「童話文学に対する希望」、181-185 頁。
- 48) 同上論考、185-191 頁。
- 49) 松井和夫「算術の児童読物」、192-193 頁。
- 50) 山本孫一「教科書以外の児童算術書」、197 頁。
- 51) 中山榮作「歴史読物の選択と利用」、202-212 頁。
- 52) 大久保馨「小学国史の課外読物」、212 頁。
- 53) 關原吉雄「理科読物に対する態度と活用」、216-217 頁。
- 54) 同上論考、222 頁。
- 55) 大石静信「体育に関する児童読物の出現を望む」、227-230 頁。

【表1】「児童図書館経営号」目次構成

	論題名	執筆者
児童図書館経営の諸問題	児童図書館の設備	小谷誠一(東京日比谷図書館児童部主任)
	児童図書館について	辻尚邨(富山市図書館長)
	京都市小学校児童図書室の現状	城野亀吉(京都市視学)
	児童図書室経営の実際	後藤良平(東京市錦華小学校長)
	西六文庫西六図書館経営の実際	大阪市西六尋常高等小学校
	我が校に於ける児童図書館の実際	亀島晟(大阪市御津小学校長)
	学校学級児童図書館の実際及理想	梅田公策(神戸小学校)
	我が校に於ける図書館教育と学級文庫	広島市袋町小学校
	児童図書館を建設せよ	細川求己(広島市中島小学校長)
	我が校の児童図書館経営	山隅衛(広島市竹屋小学校)
	小学校図書館ユートピア	川合善和(札幌師範学校訓導)
	児童図書館に就いて	中野恭一
	最良自習書の出現を望む	野澤正浩
	修身の読物に対する希望の一端	堀之内恒夫
	童話文学に対する希望	原田直茂
	算術の児童読物	松井和夫
	教科書以外の児童算術書	山本孫一
	歴史読物の選択と利用	中山榮作
	小学国史の課外読物	大久保馨
	理科読物に対する態度と活用	關原吉雄
児童図書選択の実際	体育に関する児童読物の出現を望む	大石静信
	修身科	堀之内恒夫
	国語科	佐藤徳市・田上新吉・原田直茂
	算術科	古場政喜・松井和夫
	国史科	中山榮作
	地理科	柴田來
	理科	關原吉雄
	体操科	大石静信
	音楽科	山本壽
	図画手工科	大竹拙三
	裁縫家事科	石田ひろ
	月間雑誌	

【表2】「地方的の施設経営」報告一覧

	論題及び執筆者	呼称	想定されている 図書館形態	報告の趣旨	内容
1	児童図書館の設備 東京日比谷図書館 児童部主任 小谷誠一	児童図書館	小学校に附設される児童図書館(ただし内容は公共図書館の児童室)	自身の日比谷図書館児童室について紹介し、新に児童図書館を経営せんとする方々の参考にらば	建物 入口附近の備付品 出納所 附近の備付品 図書に関する備付品 閲覧席の備品 帳簿類 用紙類
2	児童図書館について 富山市図書館長 辻尚郎	児童図書館・小供図書館	不明。子どもが利用する図書館	「幼少の時より読書の趣味を有せしむるのみならず読書によつて自己を陶冶し自己の人格を練達する手段方法の指導をしておく」ために必要	理想の図書館として、1娯楽的気分の勝つのはよくない 2放縱な気分の漲るのはよくない 3盗心を発する機会をつくらしめない様に指導すべき 4設備はすっきりと 5衛生上の配慮も行い、設備に対する責任感を持たせる 6出入りが快い場所にする 7下足の衛生、防寒、騒音の問題も考慮する 8展覧室と実験室を附設すべき
3	京都市小学校児童図書室の現状 京都市視学 城野亀吉	児童図書室・児童文庫	学校図書館		1児童図書室(児童文庫)の必要 2京都市小学校児童文庫施設現状 3提供すべき図書一覧 4閲覧方法 ①分類方法 ②目録 ③閲覧法 ④指導法 5京都市小学校児童文庫の管理法(①役員 ②設備 ③図書購入 ④配列法 ⑤手入法) 6将来に対する計画方針 7結尾
4	児童図書室経営の実際 東京市錦華小学校長 後藤良平	児童図書室	児童のための学校図書館。ただし、附設の商工専修学校(実業補修学校)青年訓練所の生徒及男女青年団員も利用。		1児童図書室の経営(①対象範囲 ②目的 ③経営方針 ④図書の選択 ⑤図書の陳列) 2児童図書室の設備(①児童図書室 ②閲覧室 ③児童図書室の備品 ④学級文庫 ⑤室の装飾) 3閲覧の方法(①閲覧日 ②閲覧場所 ③図書貸付法 ④閲覧心得 ⑤指導法 ⑥図書の整理) 4係職員及経費(①係員 ②経費) 5備付図書目録
5	西六文庫西六図書館経営の実際 大阪市西六尋常高等小学校	文庫・図書館	学校図書館と一般の図書館との機能を兼ねる。「学校職員及び児童其他一般に出来得る限り開放」。		1設立の沿革 2本館の維持方法 3設備の概要(①各室の間取り ②設備の特徴 ③蔵書の冊数) 4入館者の状況 5事務の整理 6図書館経営上の意見
6	我が校に於ける児童図書館の実際 大阪市御津小学校長 亀島辰	児童図書館	学校図書館		1設置 2設立並に経費 3書目 4利用法 5今後の企図
7	学校学級児童図書館の実際及理想 神戸小学校 梅田公策	学校学級児童図書館	学校図書館	本稿の実際及理想の一端を述べる	1経営の目的 2設備(①読書 ②図書棚 ③閲覧卓子 ④掲示板 ⑤其他) 3管理と指導(①係員 ②費用 ③読書の日と時間 ④図書の整理 ⑤指導 ⑥新聞雑誌に就いて)

8	我が校に於ける図書館教育と学級文庫	学級文庫			1児童図書館(①設立の由来と経過 ②経営実際) 2学級文庫
	広島市袋町小学校				
9	児童図書館を建設せよ	児童図書館	学校図書館と公立の児童図書館との機能を併せ持つもの。		図書館建設計画にあたって父兄にその必要を説いた際の要点。1参考書等の必要性 2学習場所の提供 3児童読物の選択提供 4児童読物に対する機会均等 5社会的施設としての図書館
	広島市中島小学校長				
	細川求己				
10	我が校の児童図書館経営	児童図書館	学校図書館		1序 2経費 3書籍選択 4分類 5閲覧の方法 6結び
	広島市竹屋小学校				
	山隅衛				
11	小学校図書館ユートピア	小学校図書館	辞書・参考書は普通教室内に備え付け、研究的書籍は特別教室に備え付ける。雑誌などは一室に集める。	「小学校に於て考へらるべき図書館の問題」には、「考察せらるべきことがらは尚多いのであるが、此の一小文は、たゞ其のアウトラインを描くだけに止めて置きたい」。	小学校生活に於ける「読書生活」の必要性。図書館に備ふべき図書。図書の分類法、室の設備、利用方法等についての概要。
	札幌師範学校訓導				
	川合善和				